資料９　活躍する女性について

○寺田千代乃（アートコーポレーション社長、2002年ヴーヴ・クリコ　ビジネスウーマン・オブ・ザ・イヤーを受賞）

まだ引っ越しが事業として成り立つと思われていなかった時代に夫と運送業を始め、優れた女性起業家をたたえるために創設されたヴーヴ・クリコ　ビジネスウーマン・オブ・ザ・イヤーを受賞。2002年5月、女性初の関西経済同友会代表幹事に就任。「結婚、子育てが仕事にもプラスになるのだから、知恵を使って頑張って」と後に続く女性にアドバイスを送る。

○松永真理（エディター、ウーマン・オブ・ザ・イヤー2002受賞）

「アイデアの目新しさより、製品の使い易さの方が大切」というコンセプトのもと、消費者が本当に欲しがっているものを敏感に感じ取り、日本最大の革命的製品と言われるモバイル・インターネット・サービス『ｉモード』の生みの親的存在となる。

○大平光代（弁護士、ウーマン・オブ・ザ・イヤー2001受賞）

中学2年生のとき、いじめを苦に割腹自殺を図る。幸運にも一命をとりとめたが、その後の生活に居場所を見つけられず、非行に走り極道の妻となる。後の養父となる人に出会ってから立ち直り、猛勉強の末、司法試験を1回で合格。現在、大阪弁護士会に所属し、非行少年の更生に努めて日夜奔走。

○角野直子（宇宙飛行士）

東京大学大学院工学系研究科修士課程修了後、宇宙開発事業団に入社し、宇宙飛行士候補生に採用される。趣味も特技も幅広く、宇宙での生活を通じて得た貴重な体験を、豊かな感性をもって私たちに伝えてくれることが想像される。

○永原裕子（地球惑星科学者、第21回猿橋賞受賞）

「地球を勉強したい」と入った東京大学大学院で、南極観測隊が持ち帰った大量の隕石を「研究対象に」と勧められ、宇宙に関心を持つ。コンドライトという隕石を調べあげ、主成分のコンドリュールの中に「溶け残り」があることを発見し、世界の注目を浴びた。「研究を続けて太陽系進化のシナリオを完成させたい」と夢を描く。

○真行寺千佳子（生物学者、第22回猿橋賞受賞）

「生物のべん毛運動」の謎に興味を持ち、世界の生物学者が注目する仮説に挑み、わずか半年で実証し、初めての論文が科学者のあこがれである英誌「ネイチャー」を飾った。常識にとらわれない独自の実験手法を持ち、「研究者にピーク年齢なんてない」が持論。手元から離さないというノートは、研究のアイデアでいっぱいだ。

○太田朋子（集団遺伝学研究者、第1回猿橋賞受賞）

確率論を駆使し、突然変異の遺伝子の行動を理論化し、日本人女性で初の米国芸術科学アカデミー外国人名誉会員に選ばれた。また、生物統計学で世界的な業績を挙げた研究者に3年に1度贈られるというオックスフォード大学のウェルドン賞を始め、国内では第1回猿橋賞や女性初の単独での日本学士院賞を受賞するなど、数多くの輝かしい賞を受賞した。「科学というのはわりと女性向きであるので、もっともっと科学の分野に入って欲しい。私のような理論的研究をする女性は日本では極めて少ないですが、ゲノムプロジェクトなど実験を含む分野で女性の活躍の場が増えてきています。」と女性に対してエールを送る。

○長谷川逸子（建築家、1990年エイボン芸術賞受賞）

生活様式への深い洞察力をベースの、硬質な素材を使い女性独自の繊細な感性と自由な発想で都市空間に新たな可能性を拓いた。設計図を基本に周辺住民と丹念な対話を重ねていくプロセス重視の方法が話題を呼ぶ。1986年、静岡の眉山ホールで日本建築学会作品賞、2000年、建築で女性初の日本芸術院賞を受賞。

○石井幹子（照明デザイナー、1994年度エイボン芸術賞受賞）

都市照明からシャンデリア、レーザーアートまでと幅広い光の領域を開拓し、日本での照明デザイナーの先駆者として、日本のみならずアメリカ、ヨーロッパ、中近東、東南アジアの各地で活躍。代表作である東京タワー、横浜ベイブリッジ、姫路城、明石海峡大橋ほか数多くの照明デザインを手掛ける。

○安田真奈（映画監督）

大手家電メーカーの総合職で、週末にはメガホンを握って映画を撮り、その作品は国内映画祭で数々の賞を総なめにしている。映画を見てくれる観客の目線に立ち、その人たちの日常の中から生まれるようなドラマを描くことがテーマ。

○竹中ナミ（社会福祉法人　プロップステーション理事長　1999年度エイボン教育賞受賞）

障害を持つ人をチャレンジすべきことを与えられた人という意味の“チャレンジド”と呼び、就労を支援。「チャレンジドを納税者にできる日本」を目標に掲げ、働いて社会を支える一員にしようというプロップ・ステーションの活動理念は、従来の福祉の概念を根底から覆し、チャレンジドに誇りと夢を与えている。

○唐澤美貴（木曽福島国際音楽祭推進者、1985年度エイボン功績賞受賞）

国内外の一流演奏家を招いて催される「木曽福島国際音楽祭」を創始し、その運営に精魂を傾け、地域文化の発展に寄与した。

○池上清子（国連人口基金　東京事務所長）

世界の人口問題に取り組む国連人口基金東京事務所の初代所長に、ＮＧＯ「家族計画国際協力財団」を辞めて就任。米ニューヨークの国連本部や国際家族計画連盟ロンドン本部に勤務した経験もある国際派。